

「ポスト・コロナに向けて、これからのライフスタイルと生き方を提案する」

半農半X(エックス)実践者
安曇野地球宿代表／安曇野市議会議員
信州自遊塾運営委員 増田望三郎



我々の信州自遊塾が立ち上がった契機は東日本大震災と原発事故であった。当時僕は自分が営むゲストハウスを開放し、被災地からの避難ステイを呼びかけた。そこに反応してきたのは、建物などを直接被災した東北地方の方たちではなく、首都圏に暮らす小さな乳幼児を育てているママたちだった。原発事故の影響がまだ明らかにされない状況の中で、浄水場の汚染が確認され、生活物資がスーパーから無くなる中で、「放射能による生活不安を感じた方たちもどうぞ来てください。」と付記した一文に、「(直接被災者ではなくても)受け入れてくれるところがあるんだ。」と彼女たちは幼子を連れて、藁にも縋る気持ちで地球宿にやって来た。

震災と原発事故は都市と地方の歪な偏依存の関係を明るみにし、都市部に暮らす人々、中でも子育てをしている若い世代に地方への移住を促した。地球宿にステイしていた母子たちの中にも、家族で移住してくる人たち、中には離婚も辞さずにやってきた人たちもいた。まさに自遊塾のメインテーマ「震災後のこれからの人間の生き方を考えよう」の通り、生き方、暮らし方を変えたのだ。

暮らし方の変化の一つとして「自分の食べるものを自分で手がける、作り出す。」ということがある。お金さえ出せば何でも手に入る都会の暮らし、しかしそれは消費一辺倒で自ら生み出すものではない。これが地方に行けば遊休農地を含め、その気になれば生産のある農のある暮らしを始められる。消費から生産へ。これは暮らしの変化だけでなく、根本的な生き方の変化でもあるとも言える。



海外ゲストさんが田んぼの除草

しかし誰もが農業者になれるわけではない。全ての人が地方回帰し農業者に成れ、というのは暴論だ。そこで生業の農業者ではなく、暮らしとして農を位置づけ、それに加えてそれぞれの特性や持ち味を発揮できるもう一つの仕事や生業を組み合わせる「半農半X(エックス)」というライフスタイルが浮かび上がる。提唱したのは京都府綾部市在住の塩見直紀さん。手前味噌で申し訳ないが、僕は現在ゲストハウスと移住促進

シェアハウスを経営しながら、市議会議員の仕事を行っている。また有志でまちづくり会社を立ち上げようとしている。すなわち、半農半ゲストハウス半移住促進シェアハウス全市議である。(※全市議という言葉には私の気持ちを汲んで頂きたい)それぞれの仕事がお互いに関連し合い、自分自身をフルに発揮させる人生を送っている。私のように多役でなくても、半農半大工、半農半 IT、半農半会社員などいろんなスタイルがあっていい。「半農半X」このたった四文字の言葉が持つ可能性は無限大だ。

今回のコロナ禍、今は Stay home で動けない状態が続く。しかし、東北大震災と原発事故がその契機となったように、コロナが終息した際に、「これからの生き方を考えよう」という人たちが現れ、都市部を離れ地方へ向かう人の流れが必ずできるだろう。その時に後押しをする理念が「半農半X」であり、この信州の地にその実践者たちの群像を分かりやすく見せておくことだと思う。信州自遊塾の役割の一つもそこにあると思っている。

2020年 5月

◇ミニコラム 事務局メンバー紹介◇

李 景煥 LEE KYONGHWAN

韓国ソウル出身。英国立ロンドン芸術大学映画科卒。幼い頃、両親と東京に4年間在住。信州 地域の古代史研究、取材のため3年前に来日。現在は安曇野市金剛寺の広報活動の他、映像 クリエイターとしても活動中。



今年1月、多文化共生のレポーターとして初めて事務局会議に参加しました。事務局メンバーの皆さんの意見交換を聞いていて、とても勉強になり、興味がわいたので、学生のつもりでメンバーに入りました。

物事について真剣に考える方々との交流のネットワークが広がり、また、活発になっていくことを期待し、事務局の一員としてサポートしていきたいと思います。

個人的な活動としては、長野県には多くの古代の遺跡と遺物が残っていて、その中には、渡来人との交流がうかがえるものも数多く残されています。それを探訪および取材しています。